

JRA競走馬総合研究所スタッフが語る

サラブレッド のおはなし

南保泰雄

(JRA日高育成牧場) = 文
text by Yasuo Nambo

競走馬の生産牧場では、遅かれ早かれ、必ず親仔を別々の馬房や放牧地で管理する時がやってくる。離乳である。離乳は、仔馬にとって、群れ社会のルールを学びつつ、人との絆をより発展させるために必要な過程と考えられている。また、すでに母馬のおなかの中にいる胎児に、十分な栄養を与えるためにも一役買っている。一方で、離乳のストレスは時として胃潰瘍など重篤な疾患の原因となるため、ストレスを軽減するための様々な工夫が必要である。

一般に離乳は、生後5〜6カ月を目途に、天候の落ち着いている日に、体調に注意しながら行うことが好ましい。生産牧場によっては、大安の日取りを選んで行うこともあるほど、離乳が無視できない大切な行事であることを物語っている。サラブレッドでは、少なくとも体重200kgを超えて、ある程度の濃厚飼料を無理なく食せる状態で離乳することが理想である。

ドキュメンタリー番組などで見られる馬の離乳シーンは、親馬が仔馬を、仔馬が親馬を一晩中呼び続け、あたかもこれからの競走馬としての厳しい道のりを物語る第一歩として扱われることが多い。しかし、近年の離乳方法は、親馬が鳴き続けるようなストレスをかけるないように、離乳前の飼養管理に重点が置かれるようになってきた。ある牧場で行われ

“競走馬” となるための第一歩、仔馬の離乳

ている例としては、生後2カ月から仔馬だけが通過できるように、馬房入口の馬栓棒の高さを調節し、厩舎の廊下にも寝藁を敷き、仔馬だけが休息できるスペースを作っている(写真)。ここで仔馬専用の離乳食を与えると、離乳前の親仔は自然と距離をおくようになり、離乳後のトラブルが減少する。

離乳当日には、親仔の放牧地から母親を数頭ずつ2、3回に分けて離す形で行うとよい。この際、他の仔馬にも友好的な、おとなしい母馬を最後に残したほうがよい。最近では、夜間放牧を実施している牧場も多くなり、準備をしっかりと行えば、普段どおりの夜間放牧を継続したまま、安全な離乳ができるようになってきた。一方で、離乳に際して仔馬には不安から来る予期せぬ行動が多発するため、厩舎や放牧地が安全であるか十分注意するとともに、食欲不振などの健康状態には特に注意を払う必要がある。

生産地ではここ数年、1〜2月生まれの馬が予定の7〜8月に離乳できないという問題が生じている。出産時期が早まっているにもかかわらず、せりで1歳馬が売れないと馬房が空かないからである。競走馬生産にとっての離乳は「早からず、遅からず」が理想であるが、周辺の事情によりなかなか思うようにならないこともあるのだ。

JRA



生後2カ月頃から厩舎の廊下に寝藁を敷き、仔馬だけが休息できるスペースを作ると、親仔は自然と距離をおくようになり、離乳後のトラブルが減少する